

天地人

第3号 No.3

July 2008

ISSN 1882-3580



中国の祁連山脈西部に位置する七一水河。乾燥地域では水河は貴重な水資源である。この水河は最近 50 年間で 150m ほど後退している。
2004 年 8 月奈良間千之撮影

Contents

「環境」の認識から「環境」の地域的・地球的保全へ 金田章裕 — 2	对“环境”的区域性及全球性的保全始于对“环境”的真正认识 金田章裕 — 2	From knowledge of the environment to environmental preservation on regional and global dimensions KINDA, Akihiro — 2
雲南と生態史プロジェクト—新しい試みの成功 秋道智彌 — 4	云南及生态史研究项目—初试成功 秋道智彌 — 4	Yunnan and the Eco-History Project: A new frontier in global environmental studies AKIMICHI, Tomoya — 4
中国科学院青藏高原研究所紹介 姚檀棟 — 6	中国科学院青藏高原研究所简介 姚檀棟 — 6	An introduction to the Institute of Tibetan Plateau Research, the Chinese Academy of Sciences YAO, Tandong — 6
SEE の環境活動 鄧儀 — 8	SEE 的环境行动 邓仪 — 8	The environmental activities of SEE DENG, Yi — 8
国境を越える環境保全のネットワーク—韓国における黄砂被害対策への提言— 李淑炫 — 10	超越国境的环境保护网—对韩国黄沙灾害对策的一点建议— 李淑炫 — 10	The environmental protection network: A proposal to control yellow sand damage in Korea LEE, SookHyun — 10
中国民間環境保護NGOの歴史と経験(中国語) 郝冰 — 12	中国民间环保 NGO 的历史与经验 郝冰 — 12	History and experiences of NGOs in China (in Chinese) HAO, Bing — 12
彼が見た風景—黄土高原の環境史 村松弘 — 13	他所看到的景观: 黄土高原的环境史 村松弘 — 13	Environmental history of Ocher Plateau, scenery observed MURAMATSU, Koichi — 13
デジャ ヴュ (déja vue) —ある既視感 応地利明 — 14	Déja vue — 似曾相識(日语版) 应地利明 — 14	Déja vue: A sense of "unfortunately we saw it here again" (in Japanese) OHJI, Toshiaki — 14
自然の摂理を心得たものを尊重しよう 袁広泉 — 15	了解自然規律的人最值得尊重(日语版) 袁広泉 — 15	Respect the people who have awareness of nature's rules (in Japanese) YUAN, Guangquan — 15
四川想起 阿部健一 — 16	四川隨想(日语版) 阿部健一 — 16	Sichuan recollection (in Japanese) ABE, Ken-ichi — 16
お知らせ — 16	最新动向 — 16	Notification — 16

「環境」の認識から 「環境」の地域的・地球的保全へ

人間文化研究機構 機構長 金田章裕



すでに40年程も前、学生として地理学を専攻に選んだ頃（残念ながらはるかに以前であるが）、「環境」という用語は地理学以外ではほとんど見聞きすることがなかった。マスコミを含め、広く社会的に認識され始めるのは、さらに10余年を経てからのことであった。

地理学では、ラッツェル（Ratzel）が「環境（自然環境）」に注目し、人間生活、社会の基礎要因として重視した（*Anthropogeographie*, Stuttgart, 1921、『フリードリッヒ・ラッツェル 人類地理学』由比浜省吾訳、古今書院、2006年）。周知のように、この思考がラッツェルに教えを請うたセンプル（Ellen Semple）やハンチントン（Huntington）を経て（自然）環境決定論としてアメリカ合衆国を中心に展開し、一方ではフランスのブラーシュ（la Blache）学派に批判的に受け止められて環境可能論と呼ばれる思考形態へと展開した。

ラッツェルの考え方は、日本では倫理学の和辻哲郎によっていち早く受容され、風土が「モンスーン型」、「砂漠型」、「牧場型」の人間ないし人間社会を形成するという思考に結び付いた（『風土』岩波書店、1935年）。

この流れの中で、1960年代初めごろの地理教科書やマスコミ等では、例えば旧ソ連のアラル海に流入するアム・ダリア川、シル・ダリア川の上流域における広大な綿花栽培地帯の造成を、すばらしい自然改造計画だと評価する論調が一般的であった。日本でも八郎瀉の干拓や琵琶湖畔の大中之湖など多くの内湖（附属湖）の干拓などがさかんに進められていた。水田の用排水分離を伴う圃場整備事業も1960年代後半から各地で急速に進行した。

この頃はむしろ、過度な環境決定論の盛行への反動とも言えるような、自然環境軽視あるいは自然環境改変への高評価といった風潮があったように思う。初期の「環境」の認識が、環境が人間に及ぼす役割を過剰に重視する方向へと結び付いた動向に対する揺り戻しと見ることもできるかも知れない。

自然環境自体に視点を置くと、1960年代頃までの

経済や自然条件の改変が一般にローカルなレベルにとどまっており、問題が顕在化しなかったものであろう。しかし、程なくその問題点が鮮明になる。

アラル海の場合、流入していた河川の過度な水利用に伴う蒸散によりアラル海自体が縮小し、今や消滅の危機に瀕しているのは衝撃的な写真等で周知のところである。琵琶湖の方は、内湖の干拓と圃場整備の進行が、湖岸や内湖の植物による水質の浄化能力の減退を招き、一方で圃場整備に伴う用排水を分離した排水路から直接流入する残留農薬・残留肥料によって琵琶湖の富栄養化が進んでアオコの増大等の問題が発生している。

このような自然環境の崩壊あるいは悪化は、人間の自然の調和あるいは復原能力を越えた質と量の経済活動ないしその蓄積の結果であろう。しかし、このような事実は、単なる「環境」の認識から、「環境」の保全をすべき段階へと切り替えるべき時期にたち至ったことを示している。

1960年代はまた、一方で地球の「寒冷化」あるいは氷河時代の到来といったマスコミの論調や、書物の刊行が相次いだ時期であった。1963年の「三八豪雪」などが一つの引き金であったように思う。このころはまた、地球全体の大気循環や気象のメカニズムに対する十分な認識が少なかったことが背景にあった。

今や地球環境の温暖化をめぐる問題は全地球的なものであることの認識が進み、グローバルな経済活動に対立するグローバルな政治的・経済的な喫緊の課題となっている。温暖化に大きくかわる二酸化炭素の発生削減などの話題はマスコミにも広く喧伝されている。

これら自然環境の問題は、全地球的であると同時に、地域的な問題でもあり、多くの場合、特に後者として顕現する。総合地球環境学研究所の研究プロジェクトは多様であるが、この地域的問題に焦点が当てられているものが多い。その現状とメカニズムを、過不足なく正確に究明することこそ、私の体験的記憶にあるような、大きな振幅のぶれを避けることに結び付くと思われる。

摘要

对“环境”的区域性及全球性的保全始于对“环境”的真正认识

人间文化研究机构 机构长 金田章裕

过去，“环境”一词并未被社会广泛地认识，在地理学界占统治地位的是 F. 拉采尔的地理环境决定论，日本学者和辻哲郎的风土论乃同出一辙。

近几十年，虽然人们对于改变自然环境的行為曾给

予过过高的评价，并对气候环境产生过一些错误的认识。但现在人类已进入区域性及全球性环境保全的新时代。这也正是地球研将要完成的历史使命。

Abstract

From knowledge of the environment to environmental preservation on regional and global dimensions

National Institutes for the Humanities (NIHU), President of NIHU KINDA, Akihiro

In the past, the environment was not something about which people were generally aware. Rather, the environmental determinism originating with Friedrich Ratzel were dominant in the field of geography, and this also applied to the *Fudo* (milieux) of Tetsuro Watsuji.

While man's ability to change the natural environ-

ment has been overestimated, and our understanding of the environment had been inadequate to date. Today, however, we have reached the stage at which regional and global environmental preservation efforts are being implemented, and the mission of RIHN as well is related to these efforts.



干上がりつつあるアラル海（阿部健一撮影）

雲南と生態史プロジェクト — 新しい試みの成功

総合地球環境学研究所 秋道智彌



プロジェクト研究「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 1945-2005」は、アジアのモンスーン地域に属する中国雲南省、北タイ、ラオスにおいて過去 50-60 年に生じた人間と環境の相互作用環の総体を、地域の生態史 (regional eco-history) として明らかにすることを目的とした。研究は平成 14 年 4 月にスタートし、平成 20 年 3 月に終了した。

研究のなかでは、ラオス南部の海拔高度が 100m に満たない低地から雲貴高原の 3000 m 級の山地までの生態環境に居住する多様な民族集団を対象とし、地域住民の生業複合、健康と栄養、資源管理に生じた変化とその要因を時系列で分析した。そして、それぞれの事象に起こった諸変化と転換の仕組みを相互連関の束として再構成し、新たな地球地域モデルを提示することを大きなねらいとした。

アジアのモンスーン地域は第二次大戦後、中華人民共和国の成立、2 次にくわつたインドシナ戦争とラオス独立、1980 年代における森林環境と経済にかかわる新政策 (中国の三定政策、ラオスのチンタナカーン・マイ政策、ベトナムのドイモイ政策)、1990 年代以降の環境重視政策 (中国の退耕還林政策、ラオスの土地森林区画制度)、2000 年以降の中国雲南省の開発など、過去 50-60 年に急激な社会・経済変化を経験し、その影響は環境にも色濃くのこされている。

中国雲南省における 4 年間の研究では、雲南大学と研究連携協定を締結し、省内で 32 人の中国研究者による現地調査を実施した。具体的には、イ、ハニ、タイ (水

タイ、花腰タイ、早タイ)、チノー、プーラン、ラフ、ワ、ミャオ、ヤオ、チワン、モン、ジンポー、チベット、リス、トゥールンなどの村落を対象とした。また日本人による碑文調査をおもに元江以南 (右岸) のハニ、ヤオなどの村々で実施した。さらに、昆明において国際ワークショップを 3 回開催し、研究の成果を逐次発表することとした。

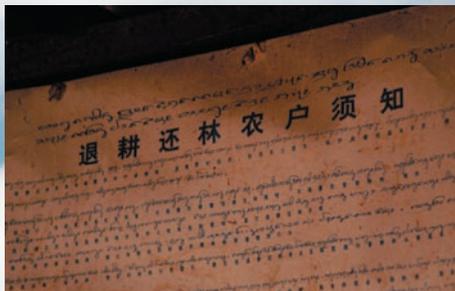
本研究のもっとも大きな成果は、当該地域における特定の動植物や資源を取り上げ、それらをめぐる村落や地域の対応、国家政策との関係、外部世界の影響などを因果関係、促進・抑制要因、遠因などの連関関係として分析し、その総体から共通項目を抽出し、生態史連関のフローチャートとして体系化することができた点である。

また 18-19 世紀の村落に残された碑文の調査から、清朝期に村落を基盤とする環境保全の取り組みがなされていたことが明らかとなり、現代の資源管理に地域の意向を十二分に取り入れるべきことを示唆した。

中国における研究成果として、中国語関係だけですでに 40 篇の論文が公表されている。また単行本としては、『中国雲南省少数民族生態関連碑文集』(唐立編、2008 年、総合地球環境学研究所)、『人類学生態環境史研究』(尹紹亭・秋道智弥主編、2007 年、北京社会科学出版社)、『生態与歴史—人類学的視角』(尹紹亭・秋道智弥主編、2007 年、雲南大学出版社)として出版されている。後者の 2 冊には、中国研究者による論考をそれぞれ 18 編、16 編収録しており、草果 (ソウカ)、茶、竹、シュロ、綿、水信仰、トウモロコシ、ジャガイモ、土地利用、生業、資源管理、森林利用、伝統的知識、木鼓などの多様なテーマをもとにした生態史の論考がなされている。生態史研究の重要性が中国政府に認められる大きなきっかけとなった。また本研究は中国の若手研究者の育成に寄与し、2 名の博士、10 数名の修士を輩出した。また、2006 年には本研究の一環として中国で初の生態人類学会を桂林において立ち上げた。本研究の推進において、雲南大学の尹紹亭教授には深いご理解と絶大なご強力をいただいた。この場をかりて深く感謝の意を表明したい。



トウガラシの市場。雲南省文山州



(左) 一面トウモロコシ畑に改変されたモンスーン林の山。(中央) 退耕還林政策の導入を示す張り紙。(右) 森林保全を訴える標識。巨木にうちつけられてあり、伐採を禁じている。(西双版纳傣族自治州勐海県プーラン人の村)

摘要

云南及生态史研究项目 — 初试成功

综合地球环境学研究所 秋道智弥

有关生态史的科研项目「亚洲热带季风地区的区域生态史综合研究 1945-2005」已在中国云南省，老挝和泰国北部地区得以完成。32 名中国学者对云南各地区进行了实地考察，根据人们对当地自然和种植资源的利用状况，分析了少数民族与周围环境之间的动态关系，进而证实了两者在

生态史上的关联。本项目的研究结果表明，在激剧变化的边境地区进行此类生态史研究是非常重要的，同时，在培养中国年轻学者以及在开创生态史研究方面都起到了创新作用。

Abstract

Yunnan and the Eco-History Project: A new frontier in global environmental studies

RIHN AKIMICHI, Tomoya

Over the last five years, a research project entitled "an trans-disciplinary study on the regional eco-history in tropical monsoon Asia: 1945-2005" was conducted in Yunnan, Laos and northern Thailand. In various parts of Yunnan, thirty-two Chinese scholars were engaged in field research. Particular natural and domestic resources were chosen for an analysis of the dynamic relations between

ethnic minorities and their surrounding environments. As a result, their eco-historical consequences were clarified. An overall evaluation of the present project lies in the academic appraisal of the eco-historical approach in China, and in the promotion of young Chinese scholars in related scientific fields.



メコン河を航行してタイとの国境交易をおこなう船。
(雲南省西双版纳傣族自治州景洪市)



ヤオ人が染色用利用する露天の藍がめ。
(雲南省文山州)

中国科学院青藏高原研究所简介

中国科学院青藏高原研究所 姚檀栋



青藏高原研究所是中国科学院新组建的研究单元之一，为“一所三部”，三个部分别设在北京、拉萨和昆明。北京部的主要功能是建立高水平实验室、开展室内科研工作和国际学术交流；拉萨部的主要功能是野外实验研究、野外观测台站的运行和国际合作的野外基地；昆明部的主要功能是开展极端环境下生命过程研究，挂靠在中国科学院昆明植物所，实行属地化管理。目前，研究所有106名研究人员，包括研究员17人、副研究员22人。另外，研究所有在读研究生106人、在站博士后29人。

青藏高原研究所主要研究青藏高原隆升及其对环境的影响，青藏高原地表过程与环境变化及其对该区域的可持续发展影响等。我们特别关注的科学问题有：1) 青藏高原的隆升机制是均衡浮力回弹还是阶段性分区抬升？2) 是青藏高原的隆升改变了季风系统还是气候变化改变了高原隆升过程？3) 青藏高原地表与大气过程是否是亚洲环境变化的驱动器？4) 青藏高原特殊环境下的生命系统和物种是如何适应与演化的？没有综合集成、多学科交叉的研究就不能有效地解决此类重大科学问题。因此，在青藏高原进行长期连续监测研究非常必要。

青藏高原研究所致力于高水平实验室和青藏高原野外监测研究平台建设。青藏高原野外监测研究主要包括三个方面：地质与地球物理观测，高分辨率环境记录和现代过程观测，地表过程和高原大气过程观测。青藏高原野外监测研究平台的主要功能是收集野外数据、采集野外样品及统一管理，坚持“高精度、高分辨率、高水平”的监测原则，建成东、西、南、北、中五个野外观测基地。

研究所的重点研究方向是：1) 青藏高原岩石圈结构与隆升机制；2) 青藏高原隆升过程与东亚环境演变；3) 高分辨率古气候环境变化；4) 高原地表系统与过程；5) 高原大气过程与全球变化；6) 极端环境下生物的生态适应性及遗传资源。

研究所的近期主要研究任务是：1) 厘定地壳和上地幔的分层速度结构，了解岩石圈深部的结构与性质；2) 研究青藏高原隆升的关键地质、地貌过程及其环境响应；3) 通过现代过程研究和特征时段研究，初步阐明过去气候环境变化过程；4) 研究高原气-冰（水）-地-生各圈层相互作用及人类活动影响；5) 研究青藏高原大气过程及其对东亚气候系统的影响；6) 建设青藏高原种质资源库。

中国科学院青藏高原研究所紹介

中国科学院青藏高原研究所 姚檀棟

青藏高原研究所は中国科学院が2003年に新たに設立した研究組織であり、北京、ラサ、昆明に研究部を置く、「一所三部」の体制を取っている。北京部の主要な役割は高水準の実験室を利用し、屋内研究作業と国際学術交流を展開することである。ラサ部は野外の実験・研究、野外観測拠点の運用と国際共同研究の野外基地となることを主要な役割とする。昆明部の主要な役割は極限環境下における生態系の研究を実施することであり、中国科学院昆明植物研究所に附属する形で、現場管理で研究を行っている。現在、本研究所には教授17人、副教授22人を含む、106名の研究スタッフが在籍している。

当研究所は、チベット高原の隆起と地表変化とそれらによる影響を明らかにするために、総合的研究体制の下、長期野外モニタリングと解析を行っている。モニタリング対象は、1) 地質と地球物理観測、2) 高分解能の環境記録と変化プロセス観測、3) 地表プロセスと高原大気プロセスの観測の主に3つである。

現在、重点をおく研究テーマは、1) チベット高原岩石圈の構造と隆起メカニズム、2) チベット高原の隆起プロセスと東アジアの環境変動、3) 高分解能の古環境変化、4) 高原の地表システムと時系列変化、5) 高原大気プロセスと全球変化、6) 極限環境下における生物の適応と遺伝資源である。

An introduction to the Institute of Tibetan Plateau Research, the Chinese Academy of Sciences

The Institute of Tibetan Plateau Research, the Chinese Academy of Sciences YAO, Tandong

The Institute of Tibetan Plateau Research (referred to hereafter as “ITP” and “the Institute”) is one of a number of research institutions newly established by the Chinese Academy of Sciences (CAS). ITP has three campuses located in Lhasa, Beijing, and Kunming. The Beijing campus is mainly for indoor research, laboratory analysis, sample storage, and international cooperation. The Lhasa campus is primarily for field work, field data collection and to provide a base for international cooperation as well. The Kunming campus, managed by the Kunming Institute of Botany of CAS, focuses on biological genetic resources on the plateau. Currently, there is a staff of 106, including 17 professors and 22 associate professors. In addition, there are 106 graduate students and 29 post-docs studying and conducting research at the Institute.

The Institute was established to study scientific problems related to the uplift processes of the Tibetan Plateau and their impact on the environment, and to study the environmental processes taking place on the Tibetan Plateau and their impact on sustainable development in the region. In addressing scientific issues related to the Tibetan Plateau, we are particularly interested in answering questions such as the following: 1) Is the mechanism of Tibetan Plateau uplifting an equilibrium floating rebound or a periodic uplift at different zones? 2) Is the Plateau uplift the cause of the Asian monsoon system? 3) Does the interaction between the land surface of the Tibetan Plateau and the atmosphere drive Asian climatic change? 4) How do bio-systems and -species evolve in an environment that is as extreme as the Tibetan Plateau? Without integrative and multi-disciplinary research, one cannot hope to answer these questions. Thus multi-disciplinary and long-term monitoring of the Tibetan Plateau is essential.

The Institute has endeavored to build both laboratories and the Tibetan Observation and Research Platform (TORP).

The TORP network monitors geophysics and geology, high-resolution records and modern processes, and land surface and alpine atmospheric processes. The purpose of the TORP network is to review filed data, in-situ sampling and integration on the Tibetan Plateau. Five monitoring bases have been established in locations in the north, south, central, east, and west of the Tibetan Plateau. The TORP network emphasizes the three “highs” principal, namely the gathering of high-precision monitoring data, the obtaining of high-resolution proxies, and the attainment of high-level achievements.

Scientists from various countries are planning to further their studies with regard to the Tibetan Plateau, and the establishment of the Institute is timely insofar as the ITP can efficiently coordinate research activities involving different agencies and organizations.

The Institute is currently focusing on the following scientific issues: 1) the structure of the geosphere and the uplifting mechanism, 2) the uplifting process and the environment of East Asia, 3) the high resolution of paleo-environmental change, 4) land surface systems and processes, 5) atmospheric processes, and 6) biological adaptability and genetic resources in an extreme environment.

The Institute is currently involved in the following research activities: 1) measuring the deep structure in the Tibetan Plateau, 2) identifying key geological and landform processes and environmental responses, 3) clarifying climatic and environmental changes in the past by studying modern processes and major climatic events, 4) studying the interaction among atmosphere, ice/water, the land surface, and biology, 5) studying the impact of atmospheric circulation in the Tibetan Plateau on surrounding regions, and 6) constructing a genetic bank for Tibetan Plateau bio-species.

SEE 的环境行动



阿拉善 SEE 生态协会 邓仪

一、SEE 协会的缘起

2004 年 6 月 5 日，102 位企业家在腾格里沙漠的月亮湖边宣誓成立“阿拉善 SEE 生态协会”，每位企业家连续 10 年每年出资 10 万元，主要致力于阿拉善的荒漠化地区的生态保护。协会的成立不但是资金来源的本土化的 NGO 产生，同时显现的是中国企业家们开始主动联合起来承担社会责任和生态责任，这在中国是前所未有的。

在中国众多的 NGO 里，SEE 协会确实有它与众不同的地方。由于中国特殊的社会组织结构，国内大多数的 NGO 基本都是依赖国外的资金生存和发展，因此在项目上的独立自主性相对较弱，而 SEE 却彻底割断了这个依赖，资金的本土化使得 SEE 在项目选择有着无限自由的自主性和创造性，以“内生式发展”的发展理念，让诸多适合当地文化、环境和能力的项目落地生根。

二、“内生式”的社区发展

在大多数人的认识里，一提环境保护，无非就是种草种树，连企业家最初也总认为这就是环保，但 SEE 的项目执行团队经过严谨的调查和研究，明了自然之所以恶化不是自然环境本身的问题，而是当地人生活、生产方式不适合当地的自然规律造成的环境问题。于是 SEE 从社区发展做起，以社区发展的形式激发社区农牧民自主保护环境，道理很简单，多少年来人一直与自然和谐共存着，只是随着外部环境的变迁及现代生活价值观的变化使人对自然的利用变得越来越失衡，而社区发展的工作恰恰就是重构和组建失落的社区公共管理机制，让社区自主规划和管理资源，达成资源可持续利用的目标。

“内生式”的社区发展模式，以当地农民为主体，SEE 只是一个催化剂和促进者。SEE 社会工作者从一进入社区，就明确自己“退”的角色，尊重和认可每一个社区都有自己独特的文化、发展模式和自己资源分配的方法，让农牧民自主选择项目、自主设计、自主实施、自主监督。而整个运作的过程，就是让农牧民自主学习、不断增强自身能力的一个过程，这也是社区人员能力内生的过程。

三、SEE 的活动

保护沙漠植被和草场为对象的项目：

该项目是在吉兰太镇的召素陶勒盖和哈都呼都格两个（嘎查）社区的 1180 平方公里的梭梭原生地实施，通过能源替代（太阳能、风能、沼气）、生计产业项目（多元化的养殖）、本土生物资源利用（苁蓉等本土药材的种植）等子项目活动，改变对自然不合理利用和过度依赖，使当地人既是保护的主体，同时也能在保护中受益。把环境利益和当地人的利益紧密的结合在一起，形成自然保护与当地人生存与环境的可持续发展。通过项目的运作提升了当地的社区自组织能力和生产、生活的技能，逐步完善社区对资源管理和利用的有效机制。

以稳定搬迁生态移民达到生态保护目标的项目：

在移民区域腰坝镇和查汉滩两个片区，选择了因为生态保护已经被政府从生态脆弱区和生态重点区搬迁出来的牧民，实施了生计可持续发展项目（舍饲养殖、节水农业、生态农业、股份制的集约化养殖）。通过节水项目和生态农业项目，有效地对地下水及土地资源的管理和利用，减缓对栖居地自然资源的压力，探索荒漠化地区开展生态农业的模式；通过股份制集约化养殖项目，实现传统养殖与现代生产技术的结合、商业资源的介入等，调整适合于当地生态规律的生产方式，促进社区整体的发展，走可持续发展的道路。该类项目的主要目标是：一、移民的生活是否稳定和可持续，直接关系到移民原地生态恢复的效果，让移民安居乐业不再回到从前居住的生态脆弱区，是迂回保护的措施之一。二、移民因为生态保护而被迫改变了习惯的生产方式和传统文化，对他们的关注充分地体现了在生态保护过程中的公平原则。

通过自然科学和社会科学的深入研究为行动提供理论支持和指导的研究项目：

不同的区域、种族和信仰都有着对自然资源特殊的理解 and 责任，作为环保组织如何有效和合理的促进项目，必须理解当地的文化内核和资源状况。为此，协会邀请了国内著名的社会学、人类学专家对“本土文化和自然资源”与“外来文化和自然资源”的关系进行了研究；

在自然科学的领域得到了李佩成院士的研究团队的支持和配合，在现有生态移民聚居的农区开展了严谨的地下水监测与评估，同时对植被、土地等研究项目也正在进行。这些成果不但是未来项目行动的重要依据，同时也为政府政策的制定提供了更全面、更专业的理论指导和借鉴。

教育培训项目：

相比阿拉善的广阔地域，仅仅依靠项目点的带动作用力量尚为薄弱。教育培训项目的开展一方面是对社区类项目的必要补充，一方面是在全盟范围内以人为本，分层次进行各类培训活动，涉及的人员包括政府部门、教育团体、农牧民、NGO 从业人员等，有效

的影响了不同的群体对自然的认识和理解，间接起到环境保护的作用，其最终将有助于当地生态保护的可持续发展。

SEE 协会通过几年来的项目实施，不作单一的生态治理和保护项目，而是凭借项目团队自身丰富的自然保护经验，以及企业家的众多资源优势，在阿拉善各类环境问题的各个层面中，寻找到适合的介入点，产生相应的项目，实实在在的摸索出一套有效的解决环境问题的途径和方法。创造了“生产、生活、生态”三生共赢的保护途径，同时得到了当地村民和政府的认同，目前 SEE 协会的项目中都有政府匹配的资金按照 NGO 方式在运行。

要 旨

SEE の環境活動

阿拉善 SEE 生態協會 鄧儀

2004 年 6 月 5 日、中国で初めての企業出資による地域型 NGO - 阿拉善 SEE 生態協會が成立した。資金の現地化は SEE のプログラムに自主性と創造性を持たせることになった。阿拉善 SEE 生態協會は「自主的な発展」という理念を目的に、単に生態保護を行うだけで

なく、現地の農民・牧民を主体とし、地域社会の文化や組織を尊重した、現地の人びとと環境との調和をはかっている。彼らの資源と能力に依拠した持続可能な発展をめざしているのである。

Abstract

The environmental activities of SEE

Society of Entrepreneurs Ecology DENG, Yi

The Alxa SEE Ecological Association, the first local Chinese NGO to be funded by entrepreneurs, was established on June 5, 2004. This funding arrangement enables SEE to be more independent and creative. SEE is guided by development from within, without singular protection. The

participation of local farmers and herdsmen, and the presence of their respective cultures, is expected. Together, they strive to promote the coexistence of local people and their environment. Using their own resources and skills they work for sustainable development.



社区发展基金



垃圾池

国境を越える環境保全のネットワーク

— 韓国における黄砂被害対策への提言 —



昭和女子大学 李淑炫

はじめに

韓国では国境を越える黄砂問題の深刻化に迫られ、砂漠地帯への国際援助事業が展開されてきた。こうした活動は政府の事業だけに頼らず、多くの民間組織によって支えられている。とくに環境教育は活動の中で重要な位置をしめており、本稿はこうした活動の位置づけと環境教育が内包している意義を考察するものである。

1. 政府の国際援助事業

中国内モンゴルの砂漠化の進行に伴い、黄砂被害はすでに国境を越えて広がっている（写真1）。韓国は最も被害を受けてきており、黄砂問題は日々深刻になっている（図1）。

こうした状況の中で、国境を越えた国家間の環境協力事業を展開することが急務とされてきた。2007年に、日中韓三カ国による環境閣僚会議が開催され、アジア開発銀行と地球環境基金に黄砂防止事業基金の支援を要請する方針を決定した。また環境共同セミナーを開き、黄砂の地域的拡散と影響及び対応策について意見交換を行った（注1）。一方、韓国山林庁はゴビ砂漠地帯における植林事業のために95億ウォン（12億円）を投資し、2016年



写真1 (上) 黄砂に覆われたソウル(李根亨撮影)
(下) 韓国のきれいな青空(李淑炫撮影)

までの10年間「モンゴルグリーンベルト造林事業」を始めた（注2）。また韓国の大企業の一つである大宇（デウ）インターナショナル社は、内モンゴルの環境企業に500万ドル（540万円）分を供出

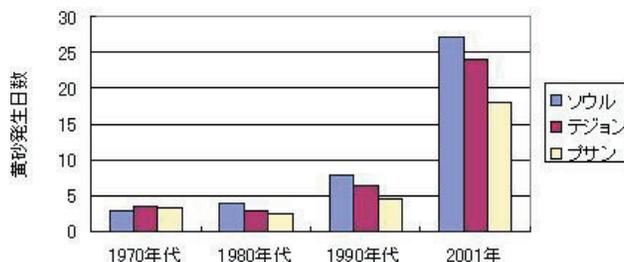


図1 過去30年間の大韓民国主要都市における黄砂発生日数

出典：市民環境研究所「2002年史上最悪の黄砂に見舞われた韓国」李宗炫作成
<http://www.enviroasia.info/contents/japanese/conference/1st/lee.html> [Accessed by 11, March 2008]

することを決めた。今回重装備機器、商用車、農業機器など各種装備が投入され、植樹や地下水掘削などの緑化事業に使われる予定である（注3）。しかしながら、こうした政府間協力による支援と企業による砂漠地への援助だけでは問題が解決したことにはならない。

2. 民間団体の活動

現在、民間団体の国際協力活動も芽生えつつある。砂漠化の進行を阻止するために韓国の民間団体である環境運動連合は、中国の20数団体と連携して環境保全活動を予定しており、また中国NGOおよび現地の住民と協力しながらさまざまな活動を展開している。中国の砂漠地帯では、遊牧民の貧困問題を解決するため、外資系企業による開発が進められているが、遊牧民こそ現地の環境を守ることができるとの考えから、現地との交流を通して問題の解決を模索している。例えば、現在韓国と中国の連携による国際シンポジウムを開催し、草原の将来のあり方について現地の住民とともに探っていきたいと考えている。環境活動のもう一つの軸は、小中高の教師による環境教育の実践である。現地に行って砂漠化の実情を直接体験し、それを教材化する作業が教師たちによって進められている。また環境保全指定地と提携し、学生達に自らの体験を通して彼らの環境認識を高めさせることも計画している。環境教育の必要性は学生だけに限らず、社会人にも必要である。環境団体は今後セミナーや社会参加という形で国民の環境認識を高めようと計画している。

3. 環境教育の可能性

現在韓国では黄砂問題（写真2）はもっとも注目されている問題のひとつであり、韓国政府はすでに砂漠地帯の緑化支援事業を始めているが、政府間の援助活動にはさまざまな限界がある。

一方、民間においては、芽生えつつある民間組織の活動の中からその可能性と潜在力を発見することができる。彼等は交流、理解、連帯、環境教育などのさまざまな方策で直接または間接的に現地の環境保全事業に関わっており、特に環境教育は活動のなかで重要な位置を占めている。

ここで、次のような提言をすることができる。すなわち、多くの緑化支援プロジェクトや環境保全運動が盛んに行われている今日でも、生態環境は依然として

悪化し続けており、このことから環境破壊を阻止するには、まず環境認識の啓発、つまり地域の人々の内的な意識変革と外的援助の連動性こそ大切で、今後より一層議論の必要があるのではなからうか。

参照資料

（注1） 「韓国の黄砂被害、年3兆～5兆ウォン」姜讚秀（カン・チャンス）記者（2007年4月2日付）参照 <http://japanese.joins.com/article/article.php?aid=86079&servcode=400§code=400> [Accessed by 11, March 2008]

（注2） 「黄砂発源地、モンゴル砂漠に政府95億投入して植林」大田＝ソ・ホンシク記者（2007年6月6日付）参照 <http://japanese.joins.com/article/article.php?aid=88127> [Accessed by 11, March 2008]

（注3） 「大字インターナショナル、「黄砂防止装備」輸出」（2007年10月15日付）参照 <http://japanese.joins.com/article/article.php?aid=25421&servcode=300§code=300> [Accessed by 11, March 2008]



写真2
黄砂被害にあった車
(李根亨撮影)

摘要

超越国境の环境保护网 ——对韩国黄沙灾害对策的一点建议——

昭和女子大学 李淑炫

現在、在韩国超越国境の黄沙问题是最受瞩目的问题之一。韩国政府进行了各种各样的沙漠地区的生态建设事业等的援助活动。另一方面，NGO等民间活动也开始起步。这篇拙论以

NGO活动的意义为焦点，就环境教育的重要性进行阐述。也就是说，今后的国际援助活动，应该重视环境教育这样的普通活动和国际支援活动的互动。

Abstract

The environmental protection network: A proposal to control yellow sand damage in Korea

Showa Women's University LEE, SookHyun

Damage from yellow sand in Korea is one of the worst problems imaginable. To address this problem, the Korean government has conducted various activities to help reconstruct the ecological system in the desert zone. Meanwhile, private activities by NGOs and the like have increased as well. This

article highlights the significance of activities by these NGOs and the importance of environmental education. International aid activity should attach greater importance to the connection between environmental education, as a kind of indirect activity, and other international aid activities.

中国民间环保NGO的历史与经验



北京天下溪教育咨询中心 郝冰

1994年，环保组织“自然之友”在北京成立，自然之友的发起人梁从诫本人是历史学家，出身于知识分子的世家。其祖父梁启超是本世纪对中国最有影响力的知识分子之一，其父母梁思成和林徽因是著名的建筑学家。自然之友的出现标志着中国草根环保NGO的诞生，在随后的一段时间，“地球村”“绿家园”“大学生绿色营”“环境与发展研究所”等机构相继出现。这些机构的发起人大都是知识分子，他们对于中国的环境问题具有“先天下之忧而忧”的忧患意识和“天下兴亡，匹夫有责”的担当。

民间环保组织在上个世纪90年的兴起有其客观的社会背景。改革开放以来快速的经济增长带来了严重的环境危机，一直以来，中国政府在环境问题的确认和解决过程中起着主导地位，但政府也开始意识到环境问题是如此复杂和严重，光靠政府的力量难以彻底解决，公众的参与已成为解决问题的前提。因此中国环保局系统成为对待环保组织的态度上是最开放的政府部门之一。与此同时，随着市场经济的发展和政府机构改革，政府职能逐渐从许多直接控制的经济领域中退出。这使得社会更加复杂化，不同的利益团体在其中相互竞争，这也为环保NGO聚集更广泛的社会力量开启了更大空间。

这一时期各个组织不约而同地把教育确立为各自的工作内容。其中典型的项目包括，自然之友的“羚羊车”“绿色希望行动”主要针对中小学生开展，“大学生绿色

营”主要面向大学生，绿家园的“记者沙龙”则是提高记者的能力，环境与发展研究所的“LEAD”面向中青年培养具有可持续发展意识的青年领袖等等。对于彼此都还不了解的政府和NGO来说，教育是让双方都能接受的安全活动空间。

在第一批环保组织的带动下，各地方的环保组织和大学生环保社团不断涌现出来。地方组织包括包括“绿色江河”“三江源生态保护协会”“绿满江淮”等一系列具有明确地域特点的组织，北京林业大学的“山诺会”、厦门大学的“绿野”、南京的“绿石”、成都的“GreenSOS”等一批活跃的学生社团开始出现在大学校园中。后来的环保组织也开始出现专业类型的多样化，如云南的“传统知识与生物多样性保护组织”、“污染受害者法律援助中心”等机构都明确各自的服务对象、专业内容和方法。进入环保组织的人群也越来越多样化，比如“绿网”，是各行各业的年轻人通过网络连接一起，倡导环保的生活方式；而2004年成立的“阿拉善SEE生态协会”的发起人全部是企业家。

据中华环保联合会统计，截止2005年底，我国共有各类环保民间组织2768家。其中政府部门发起成立的环保民间组织1382家，占49.9%；民间草根环保民间组织202家，占7.3%；学生环保社团及其联合体1116家，占40.3%；国际环保民间组织驻华机构68家，占2.5%。其地域分布主要在北京、天津、上海、重庆及东部沿海地

区；其次是湖南、湖北、四川、云南等生态资源丰富省份；其他地区的环保民间组织相对较少。

2004年起，一系列联合行动标志民间组织的战略和定位有所调整。“圆明园防渗膜事件”“怒江水坝之争”“联名抵制APP金光集团”等一系列行动标志着NGO开始通过联合行动，对政府进行相关环境政策倡导。

从民间环保组织出现到今天，中国的环境运动只有短短的十余年。在初期，参与者是极少数的知识分子精英。与十年前相比，公众对于环境问题的认知已经有了很大的变化。但是整个社会对于NGO的功能的认知还是非常有限的，NGO与企业之间的有效互动还远未形成，一系列挑战呈现在NGO前面，尤其是草根的NGO。最主要的挑战来自于以下几方面，能够在民政部门取得合法注册身份的NGO仍然很少，大部分NGO处于合法性的灰色地带。由于人才匮乏，在政策倡导工作的专业能力方面显得力不从心。因为捐赠免税制度的不完善，所以NGO的资金来源比较少，而且主要依靠于国外的基金会。组织管理水平也成为很多NGO发展的一个瓶颈。

随着中国社会的日渐开放，建立和谐社会共识的达成，中国的草根NGO最终将在大浪淘沙的历史进程中明确各自的使命与策略，为全球的环境保护尽一份力量。



流动教育(青海省)



彼が見た風景 — 黄土高原の環境史



学習院大学東洋文化研究所 村松弘一

2007年12月、中国の内蒙古自治区と陝西省の境界にあたる無定河の北に位置する統万城を訪れた。調査前日には雪が降り、一面の銀世界。城壁の中には、放牧された羊の群れが見える。1996年8月以来、2回目の訪問である。10年前には城壁に横穴を掘ったヤオトン住居に人々が住んでいたが、2000年以降、文化財保護のため移住させられたという。城壁は石灰を混ぜた土をつき固めて造られているため、白く見える。「白城子」と呼ばれる所以であるが、雪のなかではやはり城壁は黄色く見える。この都市は5世紀の五胡十六国時代に北方遊牧民・匈奴の赫連勃勃が建設し、10世紀まで利用された。農牧交錯ラインに位置するこの都市は農耕民と遊牧民による争奪の舞台であった。

この統万城の南20分ほどの所に紅墩界という地区がある。『榆林碑石』

(三秦出版社、2002年)には統万城の東または東南から出土した墓誌が47件も掲載されている。それらの墓が建設された期間は隋開皇13年(593年)から北宋開宝2年(969年)と長い。およそ400年間にわたって、統万城周辺の住民の墓域であったのである。そこから安旻なる人物の墓誌が発見されている。彼は夏州朔方県(統万城)の人で、享年56歳。神功元年(697年)10月7日に統万城の南20里のところに葬られたとある。シルクロードを駆け抜けた遊牧民・ソグド人であろう。墓誌銘には墓の位置について「けわしく続く沙丘に面し(面沙阜之崎嶇)」とある。これまで黄土高原は緑に覆われていたと歴史地理学では言われてきた。しかし、近年では、統万城遺跡西南部の遺構の下から砂層が発見されたことから、沙漠の中に都市が建設されたのではない

かという考古学者の説もある。

墓誌にあるように、彼の墓の付近から沙丘が見えたのか、確かめたくなった。紅墩界に行くと、そこはすり鉢状の盆地の底部に位置し、ふと視線を上げると、北と西に砂丘が見えた。統万城は北の砂丘の先にある。現地の老人の話によると、50年ほど前まで、低地に位置する紅墩界を流れる河川沿いは湿地帯であったという。墓誌には「水辺と陸地が複雑で(水陸交纏)」ともあることと合致する。1300年前、安旻の墓の近くには川沿いに緑が続き、北に沙丘が見えたに違いない。文献・考古資料そして現地調査からより細かい情報を知ることができるようになってきた。過去の環境を復原し、そこで人間が自然環境に対してどうかかわってきたのか。黄土高原の環境史研究はまだはじまったばかりである。

摘要

他所看到的景观：黄土高原的环境史

学習院大学東洋文化研究所 村松弘一

无定河经内蒙古自治区和陕西省，其中一段为两省区的省界。2007年12月，我造访了位于该河流北边的统万城。该城地处农牧过渡带，自古就是中国北部农业民族和游牧民族相争的舞台。从统万城南侧出土的7世纪粟特人安旻的墓志铭中，发现写有“面沙阜之崎嶇”的字句。当我来到实地观

察后发现，其北面和西面果真有沙丘分布。想必1300年前的安旻墓附近一定是一片翠绿，而且沙丘就在它的北边。我们可以通过恢复过去的环境状况来探讨当时的人们是如何与大自然相处的。黄土高原的环境史研究才刚刚起步，任重而道远。

Abstract

Environmental history of the Ocher Plateau, scenery observed

Research Institute for Oriental Cultures, Gakushuin University MURAMATSU, Koichi

In December 2007, I visited Tongwancheng located to the north of the Wudinghe River, on the boundary of Inner Mongolia and Shaanxi Province. This ancient city was once the location of fighting between farmers and nomads. In a description of the seventh century grave of Sogd Anmin, discovered north of Tongwancheng, it is written “it faces the dune.” Indeed, I did see a dune to the

north and the west while I was en route to the locale. There was vegetation near the grave of Sogd Anmin 1300 years ago, and a dune to the north. The work of environmental history is to restore an environment to its previous state, and then to consider how past inhabitants related to that environment. Environmental history research on the Ocher Plateau has just begun.

デジャ ヴュ (déjà vue) — ある既視感



京都大学名誉教授 応地利明

2007年8月に、タクラマカン沙漠北東辺のコルラから西域南道のルオチアンまで南行したことがある。コルラの南方はタリム川の流域で、その一帯には新しい都市的な住居の集落がつづく。なかには、ムラの入口の大きなアーチに「生態移民」の名を掲げたものもある。作付されているのは圧倒的にワタで、灌漑水路にそって綿作プランテーションが延々とつづく。灌漑地帯では、集落名はすべて漢語か数字番号の「団協」であった。

水路とワタが尽きてかなり南下したころ、はじめてウイグル語名のムラに出あった。そこで休息することにし、数軒しかない粗末な家の戸口に座りこんだ。村人の話では、40数年前までは水があって穀物をつくっていたが、それ以後はまったく水が来なくなり、いまは羊をほそぼそと放牧するだけとのことだった。放置された古い農具をみると、丸木舟の舳先か艫を切りとって転用したマグワだった。船底部分に人が乗って体

重を加重し、ウシに引かせて耕地の碎土・均平・鎮圧するために使用したのだろう。それは、40数年前までは、ここが、舟行も農耕も可能なゆたかな水流にめぐまれたムラであったことを雄弁に物語っていた。

このとき、これは、かつてどこかで見た風景だという既視感をいだいた。記憶は、一挙に西アフリカ・ニジェール川流域に飛ぶ。そのときは、木舟で村々を訪ねた。同川の中流部には近代的な堰堤が建設され、一面の水田地帯となっている。そこは、優越民族のバンバラ族の居住域だ。堰堤から下流は流量が一挙に減り、風景も一変する。増水期なのに、河水は川ぞいの一部の低位水田にしか及んでいない。干上がったかつての上位水田面を歩くと、堰堤ができる前はあそまで水が来ていたという話をどの村でも聞いた。ここは、少数民族のマラカ族などの居住域である。そのとき「一将功なって、万卒枯る」という言葉を想起した。「一将」とは堰堤からの灌漑受益地帯で



放置されたマグワ。
かつて水郷を行き来した木舟の舳先か艫を転用したものであろう。

あり、「万卒」とは水を断られたかつての水田地帯である。この区別は、同時に優越民族と少数民族という居住集団の違いと対応している。これとおなじ風景を、



「移民搬遷、保護生態、抗震安居、建設家園」と大書された新しい入植村。

遠く離れたタリム川流域で眺めているのであった。

アラル海の水位低下は、ワタ作のための過剰な水利用で説明される。しかしマリと同様に、アラル海が、辺境の少数民族カラカルパック族を主とするウズベキスタン内の自治共和国に所在するという事実がある。ここでも環境問題は、民族の問題と重なるのだ。

この問題を、乾燥地帯での河川水利用という点から考えてみる。乾燥地帯とりわけ沙漠地帯の大河川は、外来河川であることが多い。外来河川とは、沙漠外の湿潤地帯や高地水河を唯一の源流域として、沙漠を貫流していく河川である。外来河川では、沙漠のなかの中流域や下流域には河水の涵養源はない。ある地点で大量に取水してしまうと、そこから下流は完全に河水を奪取されてしまう。この点が、湿潤地帯の河川との相違だ。湿潤地帯では全流域が河水の涵養地帯であって、このようなことは起こらない。「灌漑の利益をいかに流域の居住集団間で分けあうか」という観点が、外来河川の水利用には欠かせないのだ。

自然の摂理を心得たものを尊重しよう

人間文化研究機構地域研究推進センター／京都大学
袁広泉



昨年の初夏、青島に用ができ、実家の棗莊そうしょうから久しぶりに長距離バスに乗った。何時からか避けるようにしてきた手段であった。学生時代に何回も往復していたが、蒼山そうざんから臨沂りんい、莒県きょけん、五蓮ごれんにかけての景色には滅入った。丘陵地帯なので、小高い山が多いが、岩石の風化した固まりで、裾だけが薄い土に覆われ、そのまま段々畑となり、これ以上の背伸びは無理と観念したような作物の株がへばり付いている。山の間に広がった畑も同じで、手で掬ってみた土は石ころ交じりで、乾ききっていた。もっと痛ましかったのは、頻りに見えてくる小型ダムや用水路の虚しい姿であった。大躍進から文革にかけて、計り知れない人力を動員して作られたそれらの施設は、初めは穀物増産につながったが、やがて過剰開発で川が干上がり、1970年代末の人民公社解体に伴って放棄され、崩れるに任せていた。心身ともに辛い風景だった。

ところが、昨年のバスでの旅はそういう辛い記憶を一変させてくれた。昔

は未舗装の道で9時間もかかったが、今は高速道路を快適に走り、3時間ちょっとに短縮されている。だが、それは全部ではなかった。岩石の山々は、上は今でも草一本も生えないが、裾野は植林や果樹園が茂り、緑一杯である。廃れた用水路はほとんど姿を消したが、手入れの行き届いた畑を見れば、水不足の心配はなさそうであった。町の周辺だけでなく、町から離れた村でもハウス栽培が盛んであった。農業経営には依然として厳しい丘陵地であるが、20数年前よりは確実に生氣を取り戻したのである。

文革終了までの長きにわたって、中国全土に夥しい数の灌漑施設がつくられたが、今は、他の省はいざ知らず、山東省では殆んど消え去っている。だが、農家たちは、それを利用しなくても済むような対応をしてきた。ダムや用水路に依存する米作りは止めて、干ばつに強い作物に切り替えられ、段々畑は果樹園や人工林に変えられ、町の周辺ではハウスでの節水型農法を採用して野菜を作っている。その結果、山

も田畑も、昔の不毛地と打って変わって、表情豊かになってきた。かつて冬の農閑期に各地で展開された人海戦はいったい何のためだったのだろうと思ってしまう。

中国農業のかつての失敗は二重の思い上がりによるものだったと思う。一つは自然に対する人間の思い上がりである。もっともらしい理由を拵えては絶えず自然に手を加えてきた人間は、何時からか自然を意のままに振じ伏せようとして、水が少ない所でも何とか稲作をし、木々だけしか育たないところに無理に作物の種を蒔こうとしたのである。今一つは、農家に対する政策の思い上がりである。本来、土地の適性と最も適した耕法を最もよく心得ているのは農家であるが、かつての中国では政策の力が過剰に働き、世代から世代へと伝わってきた経験やノウハウが無視されていたのである。今の農村がある程度生氣を取り戻せた理由を突き詰めれば、結局は農家の経験と自然の摂理が尊重されているというところに行き着くのではなからうか。



中国北方乾燥農業地域風景
(2007年夏 鄭躍軍撮影)



中国北方の三大農作物：
右からトウモロコシ・粟・コウリヤン (2006年夏 鄭躍軍撮影)

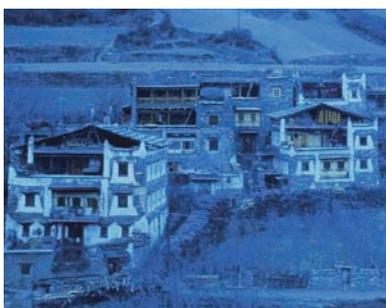
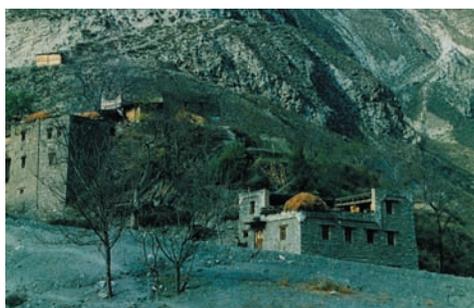
四川想起

総合地球環境学研究所 阿部健一

四川省に初めて行ったのは1990年。成都盆地は、11月下旬でも気候が穏やかで、日本全土と同じ人口を支える農業基盤の豊かさが印象に残った。盆地の西部は、すぐチベット高原である。渋る地元の運転手を説いて、高原の要所、松潘まで行った。4100mの峠を抜けると困ったことに吹雪になった。もともと口数の少ない運転手は、まったく口をきかなくなり、ハンドルを抱くようにしてゆっくり車を走らせる。真っ白の中、エンジ色の僧衣が連なって歩いているのだけが見えた。



高原が盆地と接するところに、都江堰がある。天府之国と称される盆地の豊かさも、岷江の水を振り分けるこの古代の水利施設の賜物である。当時、観光客はほとんどいなかったと記憶しているが、2000年には世界遺産の指定を受けた。写真は道中チベット系の人々の集落で撮ったもの。地震の震源にきわめて近いところである。



お知らせ

- ・2008年4月より中国環境問題研究拠点の代表が中尾正義（現人間文化研究機構理事）より鄭躍軍（総合地球環境学研究所）にかわりました。
- ・2008年度に拠点が重点的に取り組んでいるテーマは「食」です。

最新动向

- ・从2008年4月开始，由综合地球环境研究所的郑跃军接任中尾正义（现任人间文化研究机构理事）前任的中国环境问题研究基地代表职务。
- ・2008年度基地研究的主题是「食」。2008年11月1日，我们将在

2008年11月1日に中国南京市で江蘇省農業科学院と共催で「日本と中国における食と環境に関する国際シンポジウム」を開催します。また、「食」に関する研究会を随時開催しています。詳細は拠点ウェブサイト (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>) をご覧ください。

中国南京市与江苏省农业科学院共同主办「粮食与环境国际学术讨论会」。此外，本基地还将不定时地召开与「食」相关的一些研讨会。详细情况请看我们的网页 (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>)。

Notification

- ・In April 2008, Yuejun Zhen (Associate Professor at the Research Institute for Humanity and Nature) succeeded the position as the leader of the RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues (RIHN-China) from Masayoshi Nakawo (currently, an Executive Director at the National Institute for the Humanities (NIHU)).
- ・A focal theme for RIHN-China for fiscal 2008 is "food". On November

1, 2008, RIHN-China and the Jiangsu Academy of Agricultural Sciences will cosponsor the "International Symposium on Food and Environmental Problems in Japan and China" in Nanjing, China. Study meetings related to the theme of "food" will also be held as needed. Please see the RIHN-China website (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>) for additional information.

発行日 2008年7月25日

編集・発行

中国環境問題研究拠点

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

総合地球環境学研究所

TEL 075-707-2462 FAX 075-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

製作・勉誠出版

Date of Issue 25 July, 2008

Edited and Published by

RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues

457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto 603-8047 Japan

Research Institute for Humanity and Nature

TEL: +81-75-707-2462 FAX: +81-75-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

Produced by BENSEY PUBLISHING INC.